

結 論

非合理の発見とヨーロッパ精神の動揺

第一節 非合理の発見

研究の主題の一つであるドイツの神話学の変遷について、本論文では 19 世紀はじめから 20 世紀前半までを扱ってきた。神話の研究の流れは、研究の対象の拡がっていく動きに則していた。

インドからは『アヴェスター』や『ヴェーダ』などの写本がもたらされた。クレタ島やメソポタミアでの発掘では、古典ギリシアや聖書の時代を遡るさまざまな遺物が発見された。タイラー、コドリントン、アビ・ヴァールブルクらの研究によって南太平洋諸島やネイティブ・アメリカンの神話・宗教がヨーロッパへ紹介された。神話研究の対象はルネサンス以来の古典古代の枠を超えて拡がった。

そのような学問領域の拡大は、神話研究を担っていた学問である古典文献学の性格を変えることになった。クロイツァーやニーチェが専門とした古典文献学は、古典ギリシア以来の伝来の文献の復元や年代確定、資料となった典拠についての研究を行っていた。そこへ、時代の変化にともなって、従来の古典的文献の枠を超えたさまざまな新しい資料がもたらされた。

18 世紀末におけるロマン主義の神話学が既に一つの変化であったことは、見逃されてはならない。18 世紀の啓蒙主義は、神話を非理性的で稚拙な古代人の空想と片づけた。それに対し、ロマン主義は神話を人間精神の意義深い所産として捉えなおし、注意を向けた。18 世紀末にインドからもたらされたオリエント世界の神話についての資料は、ペルシア、インドの神話に改めて光を当てた。

従来、オリエント世界について、西洋の知的世界は、主に古典ギリシアの文献を通じて知見を得ていた。それは聖書がエジプトやバビロニアについて知見を得るための拠り所であったのと同様である。しかし新たな資料の入手によって、ペルシア、インドといった地域の神話そのものに触れることができるようになった。そのことが古典ギリシアの文献の捉えなおしにも繋がり、ヴィンケルマン的な静的なギリシア文化像にかわって、アジア的イメージにあふれた動的なギリシア文化という理解が生まれるにいたった。ヨーロッパと

いう枠を超えた外の世界の神話と古典古代の神話の類似点の比較という視点がとられることにより、神話が人類の所産としてより普遍的、根源的な意味を有するという考えが生まれ、結果として啓蒙主義的な神話の否定からロマン主義的な神話の捉え直しへの変化が起こった。

そうしたロマン主義の神話研究もしかしながら、どこまでも文献学的研究の範囲内に留まっていたことは、クロイツァーなどを通じて本論で考察したところであった。クロイツァーが全オリエントの神話をキリスト教的、新プラトン主義的なエマナツィオン（流出説）の図式で解釈しようとしたところに、ロマン主義の神話学のもっていたさまざまな特徴のうち最も顕著なものが現れている。クロイツァーは、神話の象徴表現の源泉を、ギリシアより遙か以前に高度な一神教的宗教を発達させていたインドの神官階級にあるとしたが、基本的には、キリスト教がその高度な宗教的認識の完成態であると考えていた。バハオーフェンはオリエントの母権制を、西洋的父権制に先立つより根源的なものとした。しかしそれは、物質主義的非合理性を体現する母権性が、合理的精神性の段階に達した父権制によって克服されたという進歩史観的図式によって捉えられていた。ロマン主義の神話学の根底には、当時革命の波にさらされ従来の価値観が動揺していたヨーロッパ文化の再生という志向があった。

啓蒙主義の掲げる合理的世界観や理性的認識を不十分なものと見なすロマン派は、合理性を超えた直観的思考や、理性的認識にそぐわない感情的把握をより根源的なものと見なす。このロマン派による神話研究が文学作品に与えた影響をみると、西洋が異文化を捉える際の先入見の問題がみられる。ロマン派の神話学は、近代西洋の文化に先立つより根源的なものの表象をオリエントの神話に重ねた。クロイツァーの神秘主義的な象徴概念やバハオーフェンの母権論的神話解釈がその例と言える。

19世紀後半以後、そのバハオーフェンをはじめとするロマン派の神話研究は文学作品における神話モチーフに影響を与えた。本論で論じたのはホーフマンスタールとヘッセの作品であったが、他にもトーマス・マンの名が挙げられる。バハオーフェンの『母権制』を読み、そこから神話に関して得た知識を創作に生かしていたのは、それらの作家の共通項であった。ホーフマンスタールの『第672夜のメルヘン』とヘッセの『デーミアン』では、オリエントの神話世界に通じる表象が女性の登場人物と重ねられていた。

近代の男性的・父権的な合理性と太古の女性的・母権の根源性・非合理性という対比は、実証的に論証されたものというよりは、精神と物質・人間と自然・主観と客観・光と闇・

といった二項対立による西洋的思考が先入見となって展開された主張と言うべきものである。そこには、異文化に対して西洋の文化の優越性を唱える価値判断が内在しており、異文化の理解を少なからず歪めている。上述の二つの作品では、男性が女性のもつ深みや不可解さに接してたじろいだり、女性に体现されるユートピア的根源性に回帰しようとしたりする志向が表現されている。それは近代西洋の掲げてきた理性の理念に対する一つの時代批判のあらわれと読める。しかしその志向を支えている女性像の神話的イメージは、西洋が非西洋に対して持つ他者イメージの枠を超えるものではない。ボーヴォワールのバハーフエン批判などはその点を指摘している。19世紀後半から20世紀前半の文学作品における女性像の神話的イメージは、西洋的思考の先入見の枠組みにとらわれていると考えなければならない。しかしこれは、さらにトーマス・マンなどの作品へ視野を拡げ、より多くの例に当たる必要のある問題である。

19世紀半ば以降の発掘によって、神話研究の範疇はさらに広がった。クレタやメソポタミアでの発掘は、歴史的に既知のものより古い時代の遺物を発見した。ギリシア文化については、古典的オリュムポス文化より古い時代の崇拝（ディオニュソスをも含めて）を明らかにした。メソポタミアでは聖書よりさらに遡ったオリエント世界の神話の存在を明らかにした。カール・ケレーニの『ディオニュソス』や汎バビロニア学派の研究にそうした成果が現れていることは本論の中で考察したところである。

発掘によるそのような発見について、ヨーロッパとオスマン・トルコ帝国の関係が背景として非常に大きな意味を持っていたことは、第一章で示したさまざまな歴史的事実と発掘作業の条件付けとを結びつけて考えるとあらためて明らかになる。クレタ島を発掘したのはイギリスのアーサー・エヴァンス卿であったが、彼がクレタでの発掘に取りかかるには、クレタ島がオスマン・トルコ帝国の支配から解放され西洋諸国の管理下に置かれたという条件があった。メソポタミアでの発掘において、西洋諸国がオスマン・トルコ帝国へ圧力をかけ通商や石油探掘などについてさまざまな権益を得ていた時代背景がある。本論では触れなかったが、ホメロスの『イーリアス』で知られるトロイアの遺跡を発掘したドイツ人ハインリヒ・シュリーマンも、発掘許可をオスマン帝国の当局から得るのにアメリカ人の協力を必要としたということである。19世紀のヨーロッパにとってオスマン・トルコのあるオリエントは、さらにそこより東方のインドへの通り道であった。スエズ運河の支配権をめぐる西洋諸国の争いなどにもそのことはよく現れている。

ポリネシア・メラネシアの「マナ」をヨーロッパに紹介したコドリントンについて改めて考えてみれば、インドやオスマン・トルコへのヨーロッパの進出と同様の背景がそこにあるのがわかる。コドリントンは南太平洋諸島へキリスト教を布教する宣教師としてポリネシア・メラネシアへ赴いた人物であった。同地域への西洋の進出のありさまは、フランス人ジュール・ヴェルヌが書いた『神秘の島』に見てとれる。

神話学の変遷に現れているのは、西洋が非西洋世界へ進出してゆくことでさまざまな異質なものに触れてゆくということである。本論においてより重要な問題であるのは、異質なものととのそうした接触が、西洋文化の内的、思弁的なところに変化をもたらしたことである。それはつまり、西洋的合理性に関わる問題、理性的な存在としての、自律的な「主体(Subject)」としての人間という理念にかかわる問題であった。

第二節 ヨーロッパ精神の動揺

「主体」とは「客体」に対する概念である。すなわち、西洋思想の根幹ともいえる精神—物質の二元論の図式のうちにあるのが主体—客体の図式である。主体という概念が問題となってきたということはすなわち西洋的二元論が問題となってきたということであった。本論においてはそのような問題の哲学的な側面に加えて、歴史観や社会的な側面に大きな注意を払ってきた。精神—物質の二元論は合理的—非合理的という価値判断をも有しているが、それが歴史的観点に立つとヨーロッパ的なもの—非ヨーロッパ的なものという図式を含んでいるという点は、本論における二元論の問題への考察から導かれた。

二元論は、二項間の明確な区別、二つの要素の間の距離の主張にイデオロギー的な側面を持っているものと言わねばならない。ヘーゲルによれば、自立した精神というものは、自然である外界に対して、おのれの領域である内面性を確立し、その領域を確定する境界を設定しているものであった。ヘーゲル的な弁証法的媒介というものも、その内面と外界の区別が確定して初めて考えられるものである。そうした精神の自立を獲得している西洋の文化こそより発達した理性的なものであって、いまだそこまで達していない（とヘーゲルがみなした）オリエント・アジアは未成熟で非理性的である、というのがヘーゲルの歴史哲学の提示した見方であった。

エルンスト・カッシーラーはそうしたヘーゲル哲学を土台にして、精神の自立する過程について、原始文化から古典古代に至るまでの神話を分析することによって実証的に考察した。カッシーラーの神話分析における「囲い込み」という概念に、ヘーゲル的な内面性と外界の距離の設定についての実証的な考察が現れている。カッシーラーによれば、神話的な空間意識や時間意識は「囲い込み」という志向に左右されている。神話的な空間意識とは、上と下、天と地、光と闇といった二元的な構造によって構築されている。ロマン派の神話学はその二元的な構図を、プラトン主義的なイデア論ともつながる精神—物質の二元論の象徴であると捉えたが、カッシーラーは、その二元的図式も自然に対する人間の反応から構築された人間精神の所産に他ならないとした。ここで改めて詳論を繰り返すことはしないが、その二元的空間意識の構築の根幹にあるのが「聖なるもの」とみなした自然

現象の「囲い込み」である。

そのような「囲い込み」の考察において注目されたのが、ポリネシア・メラネシアやネイティブ・アメリカンの宗教への考察によって知られた「呪術」である。ヘーゲルも既に、人間精神が自然の事物に支配されている状態を「呪術的」と表現している。呪術とは自然の中の客体（アニミズム的な靈魂）と主体としての人間精神との間の区別の曖昧なところになり立つものであり、主体は自然を模倣し操りながらその実自然にとりつかれている、と捉えられた。

アニミズムにおける靈魂概念をめぐるルドルフ・オットーやカッシーラーの批判は、靈魂という精神的「主体」として確立した概念を原始文化に見出すことができるかどうかを問題にしていた。それは言い換えれば、いわゆる原始文化というものに西洋思想の根幹にある精神－物質の二元論を見出すことが可能なかどうか、原始文化に西洋的合理性の要素を見出すことができるのかどうかという問題である。

カッシーラーの呪術観に影響を与えたアビ・ヴァールブルクによれば、呪術には、自然に対する恐怖の克服と、自然の力を人間の生のための利用しようとする志向がある。それは、自然の内に、現象の原因として仮定された力を模倣し、自然現象（雨など）を操ることを願うものであった。

神話や宗教に関する議論から西洋的理性の担い手である「主体」に対して根本的な疑念が突きつけられたのは、アドルノ / ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』によってであった。精神的「主体」という考えそのものが、自然の中に仮定されたアニミズム的靈魂を人間存在の内に取り入れたものに過ぎず、絶対的価値観の根拠となり得ない。主体と客体の区別は、人間が自然に対して恐怖を抱き、人間が自然から退いて人間独自の世界に閉じこもってしまったことに端を発する。人間の理性の源も、恐怖を与えた自然を征服し利用しようとする志向にある。近代以降の人間社会にあっては、征服し利用しようとする理性の力が人間存在自体を対象としているところに、個としての存在を抑圧する社会の力の源がある。

明らかに原始文化の呪術の研究と関連しているにもかかわらず哲学的考察の立場からは顧みられることのなかった神話・呪術研究を視野に入れ、『啓蒙の弁証法』ならびにアドルノの思想を考察しようとしたことは、神話学を中心命題に据えた本研究の特徴の一つといえよう。近代社会における個の存在としての「主体」の問題は、アドルノがキルケゴールを一つの実例として示した近代的市民生活の在り方に現れている。そこでは、西洋的理性の基盤であった内面と外界、主体と客体の確固たる区別が、個人と社会の乖離、すなわち

個人の精神があらゆる外的領域への参画を拒否して内面性の中に閉じこもってしまっている有り様という側面をも有していると主張されていた。

アドルノのキルケゴール論と時代的に重なるヘッセの文学作品には、内面性に唯一の真理の場を見出すという閉じこもりの姿勢がまさに読みとれるのであった。ヘッセの『デーミアン』が、神話的な二元性を問題にしつつも、最終的に自己という内面性へ閉じこもるという結末に至るのは、個の存在をどこまでも抑圧しようとする外界と、その抑圧をどこまでも受け続ける内面性との融和の不可能性の現れといえる。人間の精神、理性が、自然から閉じこもることで生じたものならば、精神が精神であり続けようとする以上、それは閉じこもり続けるしかないのかもしれない。ヘッセの文学を見ればその閉じこもりは、内面の純粋性を保持する手段として積極的に求められているようである。

ホーフマンスタールの作品には、そうした閉じこもりへの疑念が現れていたともいえる。本論ではホーフマンスタールの初期の作品を取り上げたが、そこには、世紀末ウィーンという特定の対象に対する視点においてではあっても、社会が閉じた世界を形成していることへの疑問が込められていたといえる。初期作品におけるホーフマンスタールのそのような問題意識が、やがて後期作品におけるヨーロッパとオリエントとの関係への意識と繋がってゆくべきものであることは本論で若干の指摘をしたが、この問題はさらなる課題として追求されるべきものである。

西洋的二元論が内面と外界の乖離を生んでいることは、ニーチェによるヘーゲルの歴史哲学への批判である『生に対する歴史の利害について』からも読みとれる問題であった。本論で示したように、これはニーチェが生きた時代の、変容しつつあった歴史学、文献学の抱えていた問題を突いた批判でもあった。つまりは、進歩した理性の立場から異文化の非合理性を評価し、内面性・精神の価値をその理性の根拠として掲げる態度にニーチェはイデオロギー的なものを読みとっている。

『ツァラトゥストラ』は、古典文献学者であり神話と大いに関わってもいたニーチェが、西洋的二元論に内在するこれまで述べたような問題に立ち向かうにあたり、神話的な根源にまで遡ったことを如実に示している著作であった。『ツァラトゥストラ』はその二元性を、カッシーラーが分析したような上と下・天と地・光と闇といった空間の二元性に投影し、その二元的空間を解体させるような世界観を神話象徴の操作によって描いた。ニーチェ思想の中心と考えられてきた永遠回帰という円環的な世界観も、上と下とに分断された二元

的世界観への反駁として敢えて提示されたものであった。

ニーチェの思想は、19世紀という枠を超えて現代に至るまで衝撃を与え続けている。ニーチェによる過激といえるほどの西洋的・キリスト教的価値判断への批判のもつ力の大きさは、それをただニーチェという存在にのみ帰したのでは明らかにはならない。思想史の観点だけから見ればニーチェという存在は突然に現れた独特の存在のように見えるが、ニーチェの西洋的理念への批判は、西洋文化が異文化と接触したことによって動揺し変動し続けた時代から生じた一つの必然的な所産といえることができる。

文学は神話学を介して神話を受け取った。神話と文学の関係を問題にするとき、そのことを捉えずに単に伝統的素材とそれに基づく創作という純粹に文学解釈的な視点によるだけでは、本質的な関係を捉えることはできない。神話学は歴史観や異文化に関する近代的な問題意識を反映しているものであり、自文化の掘って立つ基盤、自文化の形成されてきた長い時間に関する省察が、そこに内在している。そうした問題意識や省察をも文学作品は神話学から受け取り、神話的モチーフの中に表現するのである。